①日本では自然界などのいたるところに神々が存在すると考えられているって本当？

【八百万の神―「多神教」と「一神教」―】

日本には「八百万の神（やおよろずのかみ）」という言葉があるように、大木にも、大きな岩にも、山にも、川にも、海にも、峠にもと、いたるところに神々が宿っていると考えられてきました。これは、神はひとりであると考える「一神教（いっしんきょう）」に対して、「多神教（たしんきょう）」と言います。日本の伝統的な詩の形式である和歌にはさまざまな自然が歌われましたが、それは多神教という背景が関係しているのかもしれません。

【神話の時代からある和歌】

例えば、日本の神話を記した『古事記』（こじき、712 年に出来ました）には、素戔嗚尊（スサノオノミコト）が詠んだ「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣つくる その八重垣を」という日本最古の和歌が登場します。和歌は、神話の時代から歌われていました。

【「玉津島の神」と「明光浦の霊（みたま）」】

ここ和歌の浦、玉津島の地も、聖武天皇（しょうむてんのう：当時の天皇） が、724 年に行幸（ぎょうこう、天皇が居所から外出すること）された時、天皇が発した詔（みことのり、天皇から臣下、民衆に発せられるお言葉）の中で、刻一刻と変化する和歌の浦の風景を大切に残していくために、「玉津島の神」と「明光浦の霊（みたま） 」をしっかりとお祭りせよと命じています。それは和歌の浦の風景をいつまでも大切に残すためです。

ここでは玉津島、明光浦の地（場所自体）を「神」として扱っていることとなります（古代の日本人は「霊（みたま）」も神の意味で使用していました）。こうした神々のいる風景が、和歌の対象となるのも、当然のことだったのかもしれません。

【万葉集に見られる和歌の浦の神】

７～８世紀頃の人々が詠った歌を収めた「万葉集」（まんようしゅう）にも、この和歌の浦の風景が歌われています。有名な歌人である山部赤人は、「神代より然ぞ貴き玉津島山」というふうに、「玉津島の神」を登場させています。ほかにも、いろいろな神が登場します。例えば、伊都郡かつらぎ町の紀の川沿いにある山である「背山（せのやま）」を急ぎで越えていく旅人が、「真木の葉の しなふ背の山 しのはずて わこゆこは 我が超え行けば 木の葉知りけむ」（歌の意味：背山さんと十分にお話しをすることが出来なくてゴメン。でもここに立っているマキノキ（現在のスギ、ヒノキ）は私の気持ちを分かってくれています） と歌っており、ここにも、自然の山や大木に宿る神に親しく呼びかける姿があります（日本ではモノや自然等の人でないものを人のように取り扱う表現方法が存在します）。こういった歌をみると、人間と神がとても親しい関係にあったことが分かります。

【言霊信仰（ことだましんこう）】

昔の日本人は、言葉にも神、霊（魂）が宿っていると考えていました。このように、言葉には霊的な力があり、現実の世界に影響を与えるという考え方を「言霊」と表現します。それで、良い言葉を発すると、良い事が起きる、逆に悪い言葉を発すると、悪い事が起きると考えられていました。現代でも、お正月にニコニコして「明けましておめでとうございます！」と言葉に出して挨拶をするのは、その言葉が持つ言霊 が働いて、一年中、良い事（おめでたい事）が起きることを願っての挨拶の言葉でした。万葉集には、「新しき 年の始めの 初春の 今日降る雪の いやしけ吉事」という和歌があります。まさに、言霊の力に対する信仰を感じさせる歌です。

これまで述べたことは、遠い昔のことですが、その後、和歌では、こうした信仰に基づく自然や風景だけでなく、恋愛や離別など、人々の日常的な感情も歌われてきました。現代でも、私たちの生活には和歌に歌えるようなテーマがたくさん存在しています。

②和歌とは何か？

【歌とは？】

歌は、約 1300 年前から現代にかけて、倭歌（やまとうた）→和歌→短歌と呼び方が変化していきます。

和歌のバイブルともいえる『古今和歌集（こきんわかしゅう）』（905 年、または 914 年頃に出来ました）の序文に、とても素敵な説明があります。「歌（和歌）は、人の心の中に湧き起こる様々な感情、すなわち喜び、怒り、哀しみ、楽しみといった感情が、種となって、それが外に出て芽を出し、そして葉を出して、言の葉（ことのは、言葉すなわち歌） となる」というのです。日本語で「言葉」とは、話すことを意味する「言」という文字と、植物の「葉」という文字が組み合わさった表現となっているのですが、ここでは、植物の成長になぞらえて、人が日々の生活の中で生じる様々な内なる感情を、言葉として表に出したものが歌だと説明しているのです。

【歌と中国文学の関係は？】

日本の歌は、中国文学からの影響を強く受けています。日本で最初（奈良時代）に編集された歌集である『万葉集（まんようしゅう）』は、中国文学からの恩恵なしには出来上がりませんでした。そもそも当時は日本の言葉を書き表すための文字がありませんでした。そこで中国の文字（漢字）を使って、万葉の歌を書き表しました。ですから万葉集の原文はすべて漢字で書かれています。そして歌われた言葉の意味はもちろんのこと、歌われた内容や表現方法も、中国文学や中国思想から、多くのことを学んでいます。

【歌の音数は？】

歌は私たちが普通に会話する時の言葉とは異なり、「リズム（音律）」をもって歌われます。

たとえば、ここ和歌の浦を代表する歌が『万葉集（まんようしゅう）』に収められています。

和歌の浦に潮満ち来れば潟を無み葦べを指して鶴鳴き渡る

この歌を区切れ毎に音数を数えてみると、次のようになります。

わかのうらに（6音）、しほみちくれば（7音）、かたをなみ（5音）、あしべをさして（7音）、たづなきわたる（7音）

この歌は6・7・5・7・7となっています。一句目は6音で、字余りと言います。多くの歌は、5・7・5・7・7となり、これが歌の基本形です。「和歌の浦に」の歌と並べて、次の歌が歌われています。

沖つ島荒磯の玉藻潮干満ちい隠りゆかば思ほえむかも

おきつしま（5）、ありそのたまも（7）、しほひみち（5）、いかくりゆかば（7）、　おもほへむかも（7）

と、きれいに5・7・5・7・7となっています。5音と7音は、日本語の音調に合っていたため、日本独自の音律として、日本人に親しまれ続けてきました。

中国の詩には、五言絶句とか、七言律詩（単に律詩とも呼びます）とかいう詩の形式もあり、「五言」・「七言」が意識されていますが、日本歌の音律は、日本独自のものです。

【歌は今もさかん？】

倭歌→和歌→短歌と、遠い昔から日本人に親しまれてきた「歌」という詩の表現形式は、長い間しっかりと受け継がれてきて、現代においても短歌は、人の心に湧き起こるさまざまな感情を表す重要な詩の形式として親しまれ歌われ続けています。

ですから、短歌から日本人の心のありさまを知ることもできるでしょう。

③有名な歌人である山部赤人が歌を詠んだ1300年前と現在の和歌の浦の景色はどのように変化したのか？

【和歌の浦の今の風景】

山部赤人（やまべのあかひと：万葉集にも多くの自然詠歌を残した名歌人）が、ここ和歌の浦の地で歌を詠んだのは、今から 1300 年も前のことです。その頃の世界は、中国では唐王朝が最も盛んな時代でした。またヨーロッパでは中世の真っただ中でした。西ローマ帝国は崩壊し、その後、多くの小国に分裂していた時代でした。

そのように世界が動いている中、日本でも、聖武天皇が即位（そくい、天皇の位に就くこと）し、新しい時代が始まります。聖武天皇は即位したその年（724 年）に和歌の浦に行幸（ぎょうこう、天皇が居所から外出すること）し、その時、お伴をした山部赤人が「神代より然ぞ貴き玉津島山」というふうに、その風景の美しさを詠んだのが有名な玉津島讃歌（たまつしまさんか）でした。

今、和歌の浦に広がる景色は、1300 年前の景色と大分異なっています。時とともに海岸線は後退してきたのですが、1300 年前は海がずっと奥まで入り込んでいたためです。また、当時、現在の紀の川は和歌の浦から海に流れ込んでいたため、運ばれてきた大量の土砂が和歌の浦を埋めていったこともその原因の一つと考えられています。

現在、玉津島神社の周辺には、船頭山（せんどうやま）、妙見山（みょうけんざん）、雲蓋山（うんがいさん）、奠供山（てんぐやま）、鏡山（かがみやま）、妹背山（いもせやま）の六つの小山が、西から東に向かって、点々と並んでいますが、1300 年前は、海に囲まれた島、あるいは海に面した島状の小山だったのです。この風景を、山部赤人は「玉津島山（たまつしまやま）」と歌いました（昔の言葉で玉は宝石、津は渡し場を意味しました）。現在も妹背山だけは海に囲まれた島として残っています。西の紀州東照宮、あるいは和歌浦天満宮あたりの小高い所から眺めますと、当時の玉津島山の風景を想像することが出来ます。

【今も変わらない「昔」の風景】

今も昔に変わらない風景も残されています。それは潮干（しおひ）、潮満ちの風景です。和歌の浦では、潮が退いていくと一面の干潟が広がります。そして潮が満ちてくると先ほどまで広がっていた干潟が一面の海となってしまいます。この潮干、潮満ちの風景は、日ごろ海を見ることのない奈良の都からやってきた人たちには驚きの風景でした。 今、和歌の浦の南方に片男波と呼ばれる砂洲が広がっていますが、昔は潮が退いていくとス一っと砂洲が現れ、潮が満ちてくるとその姿を海中に消してしまうという状態でしたので、それを見た万葉びと（万葉集の詩人や編纂者、また万葉集に歌が納められている 600 年代後半から 700 年代中頃までを生きた人々を指す） は「海神の神が手（わたつみのかみがて）」、つまり海の神様の手と歌いました。

今も昔に変わらない風景と言えば、和歌の浦の大景です。東にはどっしりと名草山（なぐさやま）が鎮座しています。目を南に転じれば、長峰（ながみね）の山並み、海の向こうには下津（しもつ）の港、そして目を西に転じれば、高津子山（たかずしやま）、雑賀崎（さいかざき）、淡路島（あわじしま）と、山と海と島と空が織りなすパノラマが広がっています。こうした大きな風景は今も昔も変わることがありません。万葉びともこの風景を心ゆくまで楽しみました。

【聖武天皇もほめた風景】

724 年に和歌の浦を訪れた聖武天皇は、海に向かって広がる玉津島山、そして 360 度広がる和歌の浦の風景を絶賛して、この土地をいつまでも大切にしなさいと命じたのでした。そのおかげもあって、現代も万葉時代の風景を楽しむことが出来るのです。 和歌の浦は天皇の行幸後も、玉津島神社の整備、天満宮（てんまんぐう、平安時代）や、東照宮（とうしょうぐう）、不老橋（ふろうばし、江戸時代）が建てられていきますが、これらの建物はまわりの風景に溶け込んで、和歌の浦の風景は時代とともに豊かに変化していきます。

④「紀州徳川家」と和歌の浦の関係

【徳川家】

江戸時代は徳川時代ともいわれるように、1603 年から 1867 年までの間、日本国を統治したの

が徳川家です。初代の徳川家康（とくがわいえやす）から第 15 代徳川慶喜（とくがわよしのぶ）まで 265 年間も続きました。この間、家康の十男である徳川頼宣（とくがわよりのぶ）が、紀伊国（紀州：現在の和歌山県にほぼ同じエリア）を治める初代紀州藩主（江戸時代における、そのエリアを統治していた人）となります。この紀州徳川家は「徳川御三家」（とくがわごさんけ）のひとつとして重きをなしました。
※徳川御三家とは、江戸時代に特に権力を持っていた徳川家の 3 つの分家のことを指し、紀州徳川家はそのひとつでした。政治的にもたいへん大きな力をもっていました。

【徳川頼宣の和歌の浦整備】
紀州徳川家が、和歌の浦を重視したことは、徳川家康（いえやす）を祭る紀州東照宮（とうしょうぐう）を、和歌の浦の地に置いたことからも明らかです。
1619 年８月に初代紀州藩主として入城（入国）した徳川頼宣（よりのぶ）は、家康の三十三回忌（1648 年）を機に、妹背山（いもせやま）とその周辺の整備を進めます。妹背山には、頼宣の生母であるお万の方（おまんのかた）〔養珠院（ようじゅいん）〕を祭る「多宝塔（たほうとう）」や、眺望所としての「観海閣（かんかいかく）」などが造られ、また妹背山に渡るための「三段橋（さんだんきょう）」も造られます。三段橋の袂（たもと）には二軒の茶屋（芦辺屋と朝日屋です）が置かれました。この茶屋があった場所は、今、松尾芭蕉の句碑が立てられている辺りです。
そして頼宣は、和歌の浦の地を自然の景観を活かした一大庭園として整備します。妹背山に渡るための「三段橋」は、中国の西湖（せいこ）の庭園風景を参考にして造られました。
「観海閣」は海に面していて、ここからは、東にどっしりと横たわる名草山（なぐさやま）、南には片男波海岸、その先には広々とした海と遠くにかすむ山並みと空という、大きな広々とした風景を心ゆくまで楽しむことができます。
もちろん高台にある東照宮からも、山部赤人が「神代よりしかぞ尊き玉津島山（かみよよりしかぞとうときたまつしまやま）」と讃えた六つほどの小島が点々と連なっていく風景を手に取るように見ることができます。
頼宣による和歌の浦の整備は、祖先を祭る厚い心と、和歌の浦の風景を大切にする風流な心に依って行われ、和歌の浦は壮大な自然庭園として残され、今にいたっているのです。

【パブリックガーデンとしての和歌の浦】
こうして頼宣によって整備された和歌の浦は、お殿様のためだけのものではなく、一般庶民（民衆）にも開放されました。素晴らしいことですね。
多くの庶民に開放されていたことは、紀伊国（現在の和歌山県）の名所を描いた絵入りのガイドブック『紀伊国名所図会（きのくにめいしょずえ）』（1811 年に出版されました）に収められた「観海閣」の絵を見るとよく分かります。 その絵には、観海閣と庶民、及び観海閣とそこからの眺望が一続きの画面に収められています。風景を眺めている親子連れ、床にジュウタンのようなものを敷いて酒盛りをしている人々、座り込んで休息をとっている西国三十三所巡り（日本の仏教におけ

る巡礼の一つで、西日本の 33 の霊場を巡ることを指す）の巡礼の一行、階段を降りて観海閣を出てゆく旅人と、入れ違いにこれから観海閣に上がろうとする巡礼父子、その後ろにはしゃれた服装をした一行と、大勢の庶民が自由に観海閣を訪れ、和歌の浦の風景を存分に楽しんでいる様子が描かれています。

このように紀州徳川家の大切にした和歌の浦は、庶民にも親しまれにぎわった「パブリックガーデン」であったのです。

アンケート回答用 QR コード

※下のリンクからでも回答できます。

https://wakanoura.telewaka.tv/form/jp